

Aktionsart という概念も、より厳密な定義が必要であろう。

言語研究のうえでどのような立場をとるにせよ、われわれは生きた言語の実体から出発し、たえずそこへ立ち戻らなければならない。この実体の大がかりな記録として、本書は将来、時称を論ずる際の基礎資料のひとつになると思われる。

Untersuchungen an ausgewählten Texten,
Hueber Schwann.

メルヴィルの詩の再評価

William H. Shurr: *The Mystery of Iniquity* など

島田太郎

ハーマン・メルヴィルの詩業がつい最近までほとんど注目を浴びなかったというのは、「メルヴィル^{インダストリ}産業」とさえ言われるくらい多くの研究が年々発表されてきた事実を考えてみると、いささか不思議な気がする。なるほど1920年代のメルヴィル再評価の時コンスタブル社から出版された16巻本の全集の中に、3巻の詩集がおさめられはした。しかし多少とも彼の詩が論じられるようになったのは、40年代に入ってからのことである。William Plomer ed., *Selected Poems of Herman Melville* (1943), F. O. Matthiessen ed., *Herman Melville: Selected Poems* (1944), Howard P. Vincent ed., *Collected Poems of Herman Melville* (1947) と詩集が相ついで出版され、Matthiessenの仕事に触発された Robert Penn Warren, "Melville the Poet" (1946) というすぐれたエッセイも書かれた。しかし、メルヴィル研究の中で詩が

いぜんとして継子扱いをされていたことは、たとえば, Beatrice Ricks & Joseph D Adams eds., *Herman Melville: A Reference Bibliography 1900-1972, with Selected Nineteenth Century Materials* (1973) に収録された3,000余点にのぼる膨大な文献の中で、詩に関係したものはわずかに100余点——そのうち筆者が多少とも重要だと考えるものは40点足らず——という一事からも明らかであろう。60年代に入って Walter Bezanson ed., *Clarel* (1960) と Hening Cohen の編による *The Battle-Pieces* (1963), *Selected Poems of Herman Melville* (1964) が出て、ようやくこの分野にも光が当たりはじめたという感じがしていたところ、比較的最近になって、——と言ってもここ4年の間にだが——たて続けに注目に値するものが3点現われた。Robert Penn Warren ed., *Selected Poems of Herman Melville: A Reader's Edition* (1970), William Bysshe Stein, *The Poetry of Melville's Late Years: Time, History, Myth, and Religion* (1970), それに表題に記した William H Shurr のものが72年に出版されたというわけである。ウォレンのものは、さすがに功なり名とげた老大家——いつまでも若いように思えても、彼も今年で古稀になる!——のものらしく、メルヴィルをホイットマン、ディキンソンにつぐ大詩人と信じる一人の愛読者として、自由に己の好む詩50余篇を選んだもの。生前未発表の詩からは "Immolated" と "Pontoosuce" の2篇、それに『白鯨』から "Jonah's Song", 『ビリー・バッド』から "Billy in the Derbies" を採るといった選択にも独自の詩眼がうかがえる。(ただし筆者としてはこの選択に異議がないわけではない。) この本をかいたまでの詩選集以上のものにして最大の特徴は、全体で450頁

ほどの本の約4割をしめている序論と註とであろう。もっとも序論は、先に言及したエッセイに大幅に手を加えたものという感じがしないでもないが、それでも例の“The Ancient Mariner”論などを思い出させるような調子で、ふんだんにウォレン独特の長い註が、主としてメルヴィルの伝記的事実について——序論自体に——つけられており、それが彼の個性的な読みを支えている。しかし70頁ほどの序論のうち17頁をわずかに32行しかない“Billy in the Derbies”論にあてているのは、全体のバランスを失するものと言わねばなるまい。それはけっきょく、小説というコンテキストをはずした時にはその詩美の大部分を失ってしまうものを選集の中に収めたという誤りと無関係ではない。なるほどこの詩は、ウォレンの主張する通り（本書55頁参照）、元来小説とは無関係に、『ジョン・マーと他の水夫たち』の一篇として構想されたものかもしれない。しかし彼の詩論が[ヴィア船長——ピリー]という関係に[メルヴィル——その息子たち]という関係を読みこむところに成立するかぎりには、序論のこの部分は、小説『ピリー・バッド』論として独立した形をとるべきものであろう。（そしてまたそう読むかぎりまことに示唆に富む好論である。）このような瑕疵はあるにしても、本書は今後メルヴィルの詩を論じるものにとっては、手放せないすぐれた解釈をふくむのである。

出版の順序とは逆に、*The Mystery of Iniquity*（この題名については、「テサロニケ後書」2:7、『ピリー・バッド』21章および本書の32頁、253頁を参照）を一瞥したい。メルヴィルの詩業を有機的に一貫したものととしてとらえると称し、現在刊行中のノースウェスタン＝ニューペリー版メルヴィル全集の中の詩集を担当、準備している Robert C Ryan の協力をえたと序文で述べているので、

実は読了するまではひじょうな期待をもち、今回の書評はこの本を扱おうと秘かに決めていたのに、みごとに裏切られたという感じである。これは役には立つがつまらぬ本の見本にしたい代物であった。シャー——と読むのだろうと思う。あまり見掛けぬ姓なので、発音は自信がない。——というのは、68年に『クラレル』論で Ph. D. をとっているのだから、きっと若い人なのだと思う。そして秀才なのであろう。おうけなくもメルヴィルの全詩作品をおよそ年代順にとりあげ、各詩集ごとに一貫したイメージ群を指摘し、そこにメルヴィルの暗い世界観を読みとろうとするその志は壮とするに足る。しかし『戦争の断片』では、すべての詩を“The Cycle of Law”と“The Cycle of Evil”とに分けて論じ、後者の方がメルヴィルの心情を反映しているとしたり、『クラレル』をも、登場人物の心理の動きを軽視して、もっぱら都市、海といったシムボルのあり方からみていこうとするのは、結局のところひじょうにステイタ的な図式化となり、確かにメルヴィルの内面の苦悩や葛藤も著者は見落としてはいないのだろうが、もう一つ読者の胸に迫る力を欠いている。さらに、『ピリー・バッド』の中のヴィア船長の“With mankind ... forms, measured forms, are everything.”という口癖は『戦争の断片』の中の The “Cycle of Law” にぞくする “Dupont's Round Fight” のエコーである、ところが“The Cycle of Law”は“The Cycle of Evil”の下位に立つものであったから、ヴィアはメルヴィルの選んだ真実を語る人間ではありえない、『ピリー・バッド』はメルヴィルの平和な心境を示すものではなく、いぜんとして暗い世界観をもち続けていたことの証である、と主張する（250-253頁）に至っては筆者には承服できない。つまり『戦争の断片』の出版された

1866年から、『ピリー・バッド』執筆までの20年余りの歳月の間に、メルヴィルの“Law”に対する心境の変化がまったくおこるはずがないと決めてかかるのは、これまたあまりにもスタティックな思考である。

しかしこの本にまったくとりえがないわけではない。まず第一に、メルヴィルの詩をほとんどすべて克明に扱っているので、言わばメルヴィルの用いたイメージやシムボルのインデックスが期せずして作り上げられているということ。第二に、詩のソースについては、博搜おどろくべきものがあり、たとえば、“The Berg”について、*The Literary World*からの記事をあげ(140頁)、“To Ned”については、未発表の“Rammon”の原稿との関係を明らかにする(143-45頁)など、教えられるところも多い。

いかにも優等生的なシャーの研究とおよそ対照的なのがスタインの *The Poetry of Melville's Late Years* である。前著 *Hawthorne's Faust: A Study of the Devil Archetype* (1953) も相当個性的なものであったが、本書も、著者自身が、“And since Melville has a keen understanding of the archetypal symbols of the unconscious, I frequently undertake psychoanalytical interpretations, Freudian, Jungian, and sometimes plainly Steinian” (16頁) と揚言してはばからぬとおり、きわめてプロヴォカティヴな内容のもので、今後メルヴィルを論じる時、けって無視することはできないものである。1860—70年代の詩——ことに『クラレル』を議論の対象からはずしたことは、このように濃密な「スタイニアン」な世界を構築する上で、戦略的に成功だったと思う。18,000行以上の長さをもつ『クラレル』は、このようなクロス・リーディングにはおよそ不向きである。

それでは、スタインの読み方とは、いったいどんなものか。概括的には先に引用した彼自身の言葉以上のことは述べられそうもないので、具体的に *John Mar and Other Sailors* の中の一篇の詩をとり上げて、彼のよみ方をウォレンなどの読み方と比較してみよう。

The Maldive Shark

About the Shark, phlegmatical one,
Pale sot of the Maldive sea,
The sleek little pilot-fish, azure and slim,
How alert in attendance be
From his saw-pit of mouth, from his
 charnel of maw
They have nothing of harm to dread,
But liquidly glide on his ghastly flank
Or before his Gorgonian head;
Or lurk in the port of serrated teeth
In white triple tiers of glittering gates,
And there find a haven when peril's abroad,
An asylum in jaws of the Fates!
They are friends; and friendly they guide
 him to prey,
Yet never partake of the treat——
Eyes and brains to the dotard lethargic
 and dull,
Pale ravener of horrible meat.

ウォレンは、“Melville the Poet”の中でこの詩について、恐ろしい鯨の口にも案内魚の鰭が安住の港を見出すように、人間も真の叡智をえた時には、運命の女神の顎の中をいこいの場とする、というアレゴリカルな読み方を提出しているが、*Selected Poems* の中では、ヴィンセントも *Collected Poems of Herman Melville* の註に記している『マーディ』からの同想の文を引いた後で、“in the jaws of fate”という成句ではふつう

fate は単数で用いるし、ここでは鮫も一匹なのだから、とうぜん 12 行目の “Fates” は単数形を用いるべきである、それなのにここで複数形が用いられているのは、“gates” と韻を踏むためにすぎず、徹底的に推敲をする気力を欠いていると、いかにも詩の実作者らしい批判を述べている。

シャーは、まず Maldive=mal (evil) + dive というパンを読みこみ、次に 1 行目の “Phlegmatical” という言葉から、メルヴィルの愛読書、パートンの *Anatomy of Melancholy* 中の粘液質の人間についての描写の一節を引用、そこにも “pale”, “sot”, “ghastly”, “white”, “dotard”, “lethargic”, “dull” という表現が用いられていることを指摘する。そしてこのような一連の言葉が用いられている他の詩にふれた後で、いずれも背後に『悪魔的実体』を秘める「ボール紙の仮面」を描いているとする (137-39 頁)。

スタインは、「罪の意識におびえる性的欲望を示すもの」とこの詩をうけとり、ゴーゴンに女性のエロスの否定的側面を、鮫の口にヴァギナ・デンタータを見る。案内魚にはとうぜん男根を、そして鮫と案内魚との親しい関係に、罪の意識からのがれた性的充足感を読みとる。さらに続けて、“Where is the world we roved, Ned Bunn?” にはじまる次の 2 スタンザ 9 行は、罪の意識なく性の愉悦が与えられる南太平洋の島々の土人たちの至福の生活をうたったものである、もし前半 16 行が、自分の解釈を施したような性的意味を秘めたものでないとするれば、とつぜんこんなに話題が変わることは説明できないと断言する。しかし、この後半の 9 行は、ヴィンセントの版でこそ “The Maldive Shark” の続きとなっているが (そしてそれはヴィンセントの言に従えば、メルヴィル在世中に出版されたテキストの忠実な覆刻ではあるが)、じつは、

次に印刷されている “To Ned” という詩の冒頭に来るべきものだというのが今日では定説であり、筆者の目にした最近のテキストではすべて、“The Maldive Shark” からは省かれている。もちろんスタインはそれを心得た上で、信じるころがあってあえて上記のような解釈を提出しているのであろう。しかし独自の解釈を追うのに急なあまり、テキストの問題に一言も触れぬのはスタインの学風をよく示しているようである。話がこういうテクスチュアル・クリティシズムの問題になると、日本にいるかぎりお手上げということになる。それにしても、メルヴィル再評価がはじまってすでに半世紀以上もたつというのに、いつまで信頼できるテキストを待たねばならぬのであろうか。

“Oh, Time, Strenght, Cash, and Patience!”

Robert Penn Warren ed., *Selected Poems of Herman Melville: a Reader's Edition*, Random House, 1970

William Bysshe Stein, *The Poetry of Melville's Late Years: Time, History, Myth, and Religion*, State University of New York Press, 1970.

William H Shurr, *The Mystery of Iniquity: Melville as Poet, 1857-1891*, The University Press of Kentucky, 1972.

Georges Bataille:

*La Peinture préhistorique,
Lascaux ou la Naissance de
l'Art*

出口 裕 弘

フランス南西部ドルドーニュ県、ヴェゼー